イザベラ・バード秋田の旅（１１）矢立峠編

2018年11月25日 掲載

十三峠（新潟・山形県境）や雄勝峠（秋田・山形県境）、ロッキー山脈のラブランド峠…。旅行家として多くの峠を越えてきたイザベラ・バードが、どこにも増して素晴らしいとたたえたのが、秋田県と青森県の境にある矢立峠だ。１８７８（明治１１）年７月３１日、矢立峠を越えたバードはその魅力をこう記す。「ただ一つ孤立して堂々とそびえ、暗く荘厳である」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」）

◇――◇

「暗さ」は矢立峠の特徴だったらしい。バード以前に訪れた伊能忠敬（１８０２年）や吉田松陰（５２年）もそれぞれ「木蓋（おおい）て闇（くら）し」「杉檜（さんかい）天を掩（おお）ひて昼また暗く」と書き残している。「矢立自然友の会」の中村弘美会長（大館市）は「現在の峠はほとんど樹齢数十年の人工林になってしまったが、かつては天然秋田杉だった。大木が並び、昼も薄暗い林だったのだろう」と話す。

大館市史などによると、矢立は長木沢（同市）と共に天然秋田杉の美林で知られ、バードも峠の森や杉の美しさについて詳しく述べている。だが昭和に入り、戦時中の非常伐採や戦後復興の需要に対応するため、その多くは失われたという。

現在は国道７号沿いなど約２５ヘクタールが国の風景林に指定され、天然秋田杉の一部が残る。樹齢は２００年から３００年。堂々として天を突くかのようだ。１４０年前にバードが見た「船の帆柱のように真っすぐに伸びた巨木」に負けない威厳を漂わせている。

◇――◇

矢立峠には二つの羽州街道がある。一つは津軽藩主の参勤交代にも用いられた古羽州街道、もう一つはバードが訪れる前年に造られた旧羽州街道（明治新道）。いずれも遊歩道として整備され、地元の市民団体が維持管理をしている。近い距離にある二つの道だが、実際に歩いてみるとその違いは明白だ。

傾斜がきつく、人一人が通るのがやっとという箇所が少なくない古街道。これに対し、明治新道は傾斜も緩く、道幅も広い。各地の峠越えで苦労してきたバードは「日本の道としては信じがたいほど素晴らしい」と感銘を受けた。

だがそれもつかの間、峠の景色は一変する。急に降り始めた滝のような豪雨で沢の水があふれ、木々が押し流され、崖崩れも発生。美林や近代的な道も目の前で破壊されていった。当時の記録によると、この豪雨で青森県側の数百カ村が被害を受け、多くの田畑が水没したという。バードもほうほうの体で碇ケ関（同県平川市）に到着した。

矢立峠で自然の美しさと脅威を目にしたバード。日本奥地紀行に「私の旅の中で最も興味深い日の一つだった」と書き、１４日間に及んだ秋田の旅を締めくくった。

© 2019 Akita Sakigake Shimpo